

手記

太平洋戦争とマガダン抑留記録

和歌山県 長峰泰夫

まえがき

昭和十九年三月、和歌山市にて三か月の教育召集の通知を受け、青森県弘前市第四七師団通信隊へ入隊する。昭和十九年五月、臨時召集となり、第七三旅団通信隊へ転属になる。北海道小樽市色内小学校にしばし滞在後、小樽港を出港して北千島へ向かう。このとき、通信隊の有線、無線の兵隊を指揮したのが主計伍長であった。

昭和十九年六月二十三日、北千島占守島へ上陸して

から、第九一師団第七三旅団通信隊無線中隊に所属していた。将校、下士官が来たのは後の便である。ひんぱんにアリュウシヤン列島から飛来するアメリカ軍の空爆を受けながら守備陣地を固めていた。しかし、四月ごろから逆に内地へ大砲、弾薬、ガソリン等を持ち帰っていた。戦況は無線機で傍受していた。外電の方が正しい気がしていた。

昭和二十年八月十五日、ここで終戦になり待機していた。昭和二十年八月十八日、ソ連軍が上陸し、日本軍と激烈な戦闘が行われ、我々も霧の中、百メートルの至近距離で対峙していた。終戦後であり、八月二十三日に方面軍の命令により休戦する。

昭和二十年十月十六日、占守島の戦場掃除を終わって集合した部隊から、四個大隊四千人がソ連貨物船に

乗せられて出港した。進路を北北西に進むこと二昼夜。前方に陸地が見えた。寒々とした山は頂上が石で覆われ、下の方に樹木が生えていて変わった風景であった。

船は岸壁に横づけになり停止した。十月十八日の午後二時過ぎであった。下船して五列に並んだが、一向に出発の気配がない。上陸したのは、第九一師団第七三旅団司令部所属の部隊、直接戦闘に参加した生存部隊、その隣接部隊、海軍第五一警備隊関係等で、対ソ戦の実施と指揮命令関係の部隊所属の下士官、兵に將校若干名で編成されていた。歩き出したのは一時間以上たつてからだった。この日から九四年、この地で抑留されるとは思ひもしなかった。

マガダン地区の抑留に関しては、ほとんど知らされていなかった。ただ、占守島、マガダンを経て帰還した者のグループ内では、戦友会で資料・記録を配布していた。シベリア抑留も地区的に、一般と離れた極東のコリマ州（現マガダン州）、マガダン市周辺であったので、最近まで余り知られていなかった。マガダン市の北の奥地はタイガーといって、囚人の強制労働者

が大量に送り込まれる地で、当時ロシア人のほか、ドイツ、ポーランドの捕虜も送られてきていた。埋蔵資源の豊富な地帯だからである。

マガダンは

マガダンはシベリアの極東にあり、北緯六十度、東経百五十二度の地点にある都市で、マガダン州（当時はコリマ州）の州都となっている。昭和二十年（一九四五）当時の人口は十万人といわれていた。

夏は日が長く白夜であるが、冬は逆に日が短く、暗い時間が長い。真夏は三十度を越す暑さになる。三か月の間に芽が出、花が咲き、果実が実るあわただしい季節である。冬は長く、九月に氷結があり、厳冬では、晴れの日中でも零下十度くらいで、零下三十度〜五十度になることも珍しくない。五月に入つて雪解けが始まる長い季節である。

マガダン港は冬に凍結するが、重要な港である。北極圏の各種金属の採鉱したものを輸送する中継基地となっている。冬は砕氷船が活躍し、航路を確保する。昔から囚人の流刑地として有名で、資源開発のために

強制労働をこの奥地にあるタイガーで、道路、建築、施設、資源の採掘、輸送を行っている。悪条件のため死亡する人が多く、もしここで生きて刑を終えても、この地で生涯を終わる人が少なくない。

都市公共施設等がそろっていて、州庁舎（四階建、日本人も建設に参加）、市庁、電話局、消防署、学校、病院、育児院（デートコンピナート）、銀行、博物館、文化館（ドーマクリトール：劇場、図書館等）、映画館（ゴリキノ、ダンスホールも中にある）、公園（落下傘塔もあった）、旅館一号、旅館二号（兵舎にしていた）、ドーマ十五号（日本人が三年かけて建築、美しさはマガダン一）、放送局（ラジオコンツェル）等。

倉庫群、発電所、水道供給所、自動車工場、ガラス工場、ビール工場、れんが工場、木工工場、被服工場、パン工場、洗濯工場、化学工場等。

陸の孤島と言われるように、寒冷地であるから、食糧、資材はウラジオストック、ナホトカから二千七百公里の海上輸送に依存している。マガダンの奥は山岳地帯も多く、未開発の地帯が広がっているところであ

る。この奥地へ食糧、物資を送る重要な拠点となっている。

マガダン市は当時、日本人抑留者は市内に二千人、ここから八十七キロのところまで二千人が点在して、道路拡張工事、鉄道整備、伐採、炭鉱採掘、ガソリン配管工事をしてきた。市内では、港湾、倉庫、建設、工場等、多くの職種で労働していた。

シベリアのマガダン抑留

昭和二十年十月十六日、占守島出港

北千島占守島の長崎から陸軍三千人、海軍千人、合計四千人がソ連貨物船に乗船する。船内は油臭く、むっとする暖かさで、板敷きの二段式寝台が並んでいて、そこに全員が詰め込まれる。出港した船は北北東へ進路を取り、白浪を切って進んだ。甲板には便所があり、臭いがきつく、長くいられなかつたので、ほとんど船内にいる。東京ダモイ（掃運）もなくなり、不安は隠せなかつた。

昭和二十年十月十八日、マガダン港へ上陸

陸地が見えてきた。山の頂上が石だらけで、下の方

に木が見える殺風景なところではあるが、船は岸壁へ横づけになる。二隻の船が先に横づけになっていた。全員、荷物を背負い下船して、五列に並び整列する。人員の点呼だろう、ソ連兵が一生懸命数えている。一時間半かかりやっと歩き出した。だから坂を上がっていくが、時々停止しては歩き出す。ロシア人の男女、子供が口をもぐもぐさせて珍しそうに眺めていた。(松の実を食べていたため)

だんだん冷えてきたころ、大きな建物に着いた。中はほこりっぽく、天井に裸電球が数個ぶら下がっている。二段になった板敷きの寝台がある。ここに五大隊の千人が入れたが、寝台だけでは足らず、土間もいっぱいになり、荷物と一緒に座るのが精いっぱいであった。夕食の炊事が始まったが、水が足らず、砂が混ざった米しか炊けなかった。こんな生活を数日していると移動の命令がきた。

道路の拡張作業をすることになる。ポルト(港)を〇キロとし、奥地へ八十七キロまでの七メートル幅の道路の両側を一メートル拡張し、九メートル幅の道路

にするという作業である。道路を四区間に分けて、一中隊二百五十人ずつで一区間を担当することになる。ラーゲル(収容所)のある地点に一個中隊を配置していく。第一中隊：六十五キロ収容所、第二中隊：三十キロ収容所、第三中隊：三十九キロ収容所、第四中隊：十九キロ収容所と決定する。我々第四中隊は、井辺准尉以下二百五十人が十九キロのラーゲルへ行くことになる。

昭和二十年十月二十二日、十九キロ幕舎到着

各大隊ごとにトラックに分乗して、それぞれの地点へ出発する。我々五大隊四中隊は、十九キロの道路標識の少し手前のところで下車する。新しい三棟の布製幕舎が建っている。ほかに炊事の棟がある。この季節になると日も短くなっていて、冷え込みも増しているように思える。それぞれ割り当てられた棟に入り、荷物を整理する。夜は持ってきた衣類を全部かけて横になるが、ぞくぞくして寝つかれない。うとうとしているうちに朝がきた。

昭和二十年十月二十三日、十九キロ幕舎周辺整備作

業

幕舎は三棟と炊事棟、便所、少し離れて監督の家と兵隊の住居がある。幕舎は寒くて睡眠できないし、付属設備も整っていないので整備作業をすることになる。幕舎の保温は周りに丸太を積み上げ、布地との間に土とおが屑を詰め、屋根の部分に草を根こそぎとつて、敷きつめて保温するというものだった。

○丸太の切り出し運搬

各班が奥地へ雪を踏みながら入っていく、手ごろな落葉樹を切り倒してからひと休みのため、たき火を燃やし円陣をつくり、お国自慢の食べ物を披露し合って、ちようど昼ごろ幕舎へ帰り、午後もう一回、丸太を持ち帰って一日が終わる。兵士がついてくるが、言葉が通じないので会話もできず、たき火の周りを回ったりして体を持て余していた。

毎日毎日、この作業を繰り返す。木取りの距離も段々遠くなり、除雪をせずに雪の上に出た幹の下を切つて、休憩時間を確保するようになる。用具はラバータ（スコップ）、ピラー（鋸）、タポール（まさかり）の

三点セットであるが、アメリカ製の方がよく切れた。帰ると、手がかじかんで感覚が鈍くなるので、バケツにお湯を入れて手をつけて、手が痛いような、かゆいような感じを経て、手の感覚を回復するまでつける。

○外壁の保温作業

別の班は、運ばれた丸太で柱を二本ずつ立てて、間に丸太を横に積み上げていく。幕舎の布と丸太の間に、土とおが屑を混ぜたものを詰めていく。詰める幅は平均五十センチで、下はこれより少し広く、上は狭くなる。屋根には根つきのツンドラを敷く。ただし、ストープの煙突回りは空ける。ここまで終わるのに半月以上かかってしまった。

○垣根づくり作業

幕舎の保温作業を終了して、今度は外回りに垣根をつくることになる。丸太の柱を立て、丸太の横木を渡して固定し、松の枝をさして幕舎と外部と隔離する。出入り口は一か所のみである。普通のラーゲル（収容所）は有刺鉄線の二重の囲いになっている。

○望楼建て作業

兵士の歩哨が夜間警備のために登るもので、垣根の角に建てられる。四本の丸太を建て、上に望楼の床、屋根、腰回り板、はしごをつくって終わる。夜、兵士はシューバー（内に毛のあるオーバー）の膝下と靴の下より横に長いものと二枚着て立哨する。蒙古系の兵士が多かった。

○炊事場の改修

日本人が炊事をやりやすいように改修する。

○ロシア式便所

角材と板でつくった簡易式であるが、日本人から見ると驚きだった。三方は囲ってあるが、入口の扉は低く中が見える。敷き板には八個の丸い穴（直径二十五センチ）が等間隔に空いているだけである。用便には、二人目からは前の人のお尻を見ながら座ることになる。外には、次の人が並んで待っている。大はよいが、小ははみ出してできない。初めは大変抵抗感があった。そのうちに諦めたが、後味は複雑だった。

○代用湯たんぼ

ストーブにあたるも顔が赤くなり、衣類はホカホカ

だが背中がぞくぞく寒いので、せんべい焼きのように前と後ろを交互に暖め寝るが、冷めるのが早かった。そこでだれがやり始めたか、手ごろな石をストーブに針金でつるし暖めて、石を布に包み抱いて寝た。みんながまねするようになった。

何とか落ち着くのに約一か月かかった。

昭和二十年十二月、十九キロ幕舎収容所 道路拡張

作業

幕舎の整備作業が終わると、予定していた道路拡張の作業が始まった。当時のマガダンから発するコリマ街道は奥地タイガーへ通じる重要な道路である。タイガーへ、食糧、物資を常時輸送して、労働者の生活、資源開発を維持している。この道路は幅員七メートルであるが、この道路の両側を一メートル広げて、幅員九メートルの道路として、より安全性を高めようとするものである。

道路の舗装は土と小石のみでできている。路面は凍結で十分締め固まる。この道路はポルト（港）を〇キロ口として、一メートルごとに道標が立っているが、今

回は八十七キロまでを四区に分けて、その一区を担当する。道路の奥地に向かつて右が道路より低い平地で、左が丘陵になっているので、左の丘陵の土を掘って両側へ埋め立てる作業である。丘陵の土は五、六十センチくらい永久凍土となっていて、これにローム（鉄棒）で穴を数本あけて、ダイナマイトを仕込み、爆破して柔らかい土を出し、運搬して埋め立てるのである。

用具は、ローム、ラバータ（スコップ）、カイロ（つるはし）、ターチカ（木製荷積用一輪車）、ターチカを通す板等である。別に発破用ダイナマイト、導火線等がある。

服装は戦闘帽、防寒帽を重ねてかぶる。防寒外套、毛普通外套、毛軍上衣、防寒シャツ、綿シャツ。毛ズボン、毛袴下、綿袴下、ふんどし、靴下二枚。ソ連製綿入り布防寒靴、防寒手袋と所持している全衣類を着装して重かった。防寒衣類、靴はたき火でよく焼けて補修に追われる。

朝、整列し、近ければ徒歩で、遠ければトラックで現場へ着く。まず、グループごとにたき火にあたり、

一息入れて作業にかかった。兵隊もついて来ていて、あちこち歩いているだけで退屈そうだった。開始当時は、ノルマについては全然認識がなかった。朝八時から夕方五時まで、昼食時間一時間休んで仕事をすればよいと思っていた。

まず、土を出さないといけないが、永久凍土となっていて、カイロ、ラバータでは菌が立たない。近くの盛り土のある場所を選んで、五人前後の班をつくり、発破かける位置を決める。ここへ各人がロームで一本ずつ穴を掘り、一・一・二メートルに達したら、ダイナマイトと導火線を入れ、土をかぶせて爆破して、柔らかい土の層を出して、その土をターチカに積んで道路の側面に埋めていくのである。

穴は場所により掘るのに難易があり、簡単にいかなかった。大体午前中に穴を掘り、午後に発破をかけてから土を運搬するのが一般の作業であった。従って、土は半日しか出せなかった。寒いから監督がいないと、たき火にあたり休憩するから、仕事ははかどらないので、正味の労働時間は短くなってしまふ。ロシア人の

監督は作業量が少ない、「ブローハ、ブローハ」(悪い、悪い)とぼやいている。

それで、穴を早く掘り、土出しを早くするしかないと考えた。そこでロームの先を常に土を掘りやすいように、先端を平らに広げる加工を作業から帰ってすぐ行って、自分専用とし、寝台の下に保管する。この方法で掘る場合は、周りを崩しながら下へ掘るとスピードが上がった。しかし、石に突き当たったりすると、先端が丸くなり、現場で修理して使用した。また、ロームを修理した後、新しく別の穴を掘ることもあった。けれども、穴掘り、発破かけ、土掘り、運搬では、場所によりばらつきがあり、思うようにいかなかった。

土出し現場は、翌日のために袋をかけ、その上に土を撒いて、翌日は袋を持ち上げれば凍結が少なく、早く土出しができて能率が上がるが、別の場所へ行けば、また穴掘りからなので、一から作業となった。衣服をたくさん身に着けているから、動作が鈍いので進度が遅いのは仕方ない。食糧も、日本食がなくなりロシア食になり、カーシャ(おかゆ)では力も出なく

なってくる。なれない食事、作業、寒さで体力を消耗して、栄養失調者がじわじわふえていった。そのうち雪が降ってきて作業が除雪へ変わっていった。

昭和二十年十二月、十九キロ幕舎収容所、除雪作業
除雪は、初めのうちは、六十センチ角のベニヤ板に柄をつけたスコップにて、雪を道路の両側に寄せ、土をたたいて円弧にし、風が吹いても吹きだまりにならぬようにうるさく指示される。道路に積もっても、マシーナー(自動車)がストップしないように除雪した。そのうち雪の量が多くなり、また風が吹くと、雪だまりができ始め、道路も厚く雪に覆われるほどになってきた。

こうなつては鉄製のラバータ(スコップ)で道路下へ雪を放り投げるようになる。マシーナを何が何でも通すという監督の態度であった。聞くところによると、特にプランマシーナーという十五トントラックに三十トンの有蓋ワゴンを引くものは、日時を決めて走らせて、目的地へ着けないといけない。重要な車だから、絶対ストップさせるなという要請である。奥地では、

これが着かないと食糧不足で餓死するかもしれないという。従って、夜起こされて除雪に狩り出されることもあった。夜は真っ暗にならず、何とか歩ける暗さだった。

特に記憶に残るのは、十二月三十日の夜中に起こされ、四―六キロの地点の除雪に行かされたときである。強風と寒さの中で、二・五メートルくらいの高さに雪が吹きたまり、雪を投げても投げてもすぐたまり、お手上げの状態であったのに、手を休ませてくれない。顔を風上に向けたら、目も明けられない。手もかじかんでラバータを持つこともできない。除雪をやめてラバータを腰の後ろに差し、手袋をバタバタたいたたりさすったりして、手の感覚を確かめるのに精いっぱいである。

手の感覚を保つため、手袋の中の手を手袋の内面にさわらないように、手首で支えて手をちゅうぶらりんとして下げ、その辺を走っていた。夜が白々と明け始める。小便が頻繁にしたくなるが、手を出すとかじかむ。そのうちボタンの開閉もできなくなり、あけたま

まだ。小便の量もチョロツトしか出ない。その繰り返しで、泣きたくなるがどうしようもない。そのうちバタバタ走っているのをロシア人の監督に見つかり、アツと思つた。その瞬間、監督が雪をすくい、私の鼻を雪でごしごしさすってくれた。鼻の先が凍傷で白くなっているという。あわてて自分も手袋で雪をすくい、鼻の先を感覚が出るまでこすり、だれかに見てもらつて赤くなるのを確認してもらつた。自分では凍傷で白くなくても全然わからない。他人に見てもらうしかない。

凍傷で皮膚が白のうちはいいが、黒くなつたら手遅れで、腐つて切り取らないといけなくなるという。

やがてロータリー式の除雪車が来て、みるみる雪を吹き飛ばすのを眺め、ヤレヤレと思つたものでした。

ところが、迎えのトラックがなかなか来ない。また、走り出した。やっと来たトラックにはい上がり、転がり込んだ。収容所へ帰つたらふらふらとよるめいていた。夜中に起こされ、飲まず食わずに約十時間、吹雪の中を動きまわつたが、こんな苦しい経験は初めてで

あった。

昭和二十一年一月、十九キロ幕舎收容所、除雪と道路作業

昭和二十一年一月一日になったが、携帯していた米を炊いて、マス缶詰と缶詰を開けて、周囲の人たちと食べるだけだった。一昨日の除雪で身も心も疲労していたのが回復していないからだ。正月休みもなく、また働きに出る。作業は除雪と、雪がやんだら道路作業が行われた。体はだんだんやせるばかりであった。作業は少しも能率が上がらない。手がかじかんで、道具を長い間持つていられない寒さが続いている。たき火をたいてあたっていていると、兵隊が来て消されてしまう。兵隊が去ると、また火をおこしてあたる。いたちごっこをしている。

作業を終わって帰っても、相変わらず食べ物のお話くらいしか話すことがない。こんな暮らしをしているある日、朝起床の時間になっても起きない戦友がいた。同年兵で、岩手県出身の三十五歳前後と思うが、静かに死亡していた。体が大きかったが、寒さと栄養失調

で亡くなった。最初の犠牲者である。

昭和二十一年二月、十九キロ幕舎收容所、除雪、道路作業

作業は、毎日同じことの繰り返しであったが、私の方は髪の毛や眉毛が黒から茶色に変わってきた。栄養失調が進んでいるようだ。衣服をあるだけ着て汗もかかないが、その重量はかなりの負担になっていることは間違いない。石があつてもまたげずに転んだり、木の根につまづいて顔に怪我したり、注意力が散漫になる。

昭和二十一年三月、十九キロ幕舎收容所、患者班

三月に入ると歩くのも大儀になり、作業には出ず患者班となって、所内にて雑用をするようになる。この数も次第に多くなり、月末には四十四人になった。全人員の一七%を越える人数にふえてしまった。作業に行く人もつらいし、休む者もどうなるかむなし。まき割り等、軽作業をして日を送っていた。

昭和二十一年三月、三十キロ收容所、オカ收容所
十九キロの幕舎收容所（四中隊）で、栄養失調者の

続出でソ連医師が来所して、腕や腹の肉を引っ張って栄養失調の程度を確認して、ここ三十キロ収容所へ送りこまれる。ほかの一、三中隊からも入ってくる。

三十キロの収容所は、五大隊二中隊の収容所である。この収容所の奥（東側）に幕舎が一棟建ててあり、ここへ各中隊から送られた栄養失調者が全員収容される。ソ連ではオカと呼んでいた。入所者は百人前後だったと思う。二中隊の作業員が出た後に、日課が始まる。五人に一人の割合で当番を定め、当番の飯上げが行われる。メニューは一般と違ってかなり良質のものが出された。フレーブ（黒パン）、カーシヤ（濃いおかゆ）、スープ（豚脂入りキャベツのスープ）、ミルク（砂糖入りの牛乳）、スラギック（ビタミン剤の果汁）が出される。一般では黒パンは昼食用であるが、オカでは、朝も二百グラムぐらいが出た。

三食とも同じ献立になるが、一般と比べれば栄養価は数段上である。作業が全然なく、食べて休養しているだけなので、体力が徐々に回復しているのが見えてくる。幕舎なので、夜の冷え込みはまだきつい。夜中

に二、三回小便しに起きる。衣服を着て、防寒外套を引っかけて外へ行かないといけないが、正規のところへは遠いので近くの傾斜地で済ます。用便するとすぐ凍るので、黄色い氷がだんだん丘になってくる。ツルツルの黄色い小便の丘ができる。臭くないので、その上に乗って用便することもある。温かくなると溶けてなくなるが、臭くないからそのまま、来年も同じことを繰り返すようになるだろう。

四月を過ぎて五月に入ってくると、周りに新緑が目につくようになり、日中は外に出て日光浴をするようになる。五月の中旬に屋根に上がり、シラミ取りをしていた者がロシア人に見つかった。寒さのほかに、このシラミは、人が寝入るとシャツの縫い目の中にひそんでいたのが、はい出てもそもそと歩き皮膚をかむと、くすぐりたいし、またかゆくなる。このシラミが人間の衣服に住んでいると、不眠の原因にもなっていた。

早速、アスカメラ（熱気で殺虫消毒する容器）に衣服全部を入れて、シラミ退治をすることになる。毎日数回行われ、五、六日で全員が終わり、完全に殺虫消毒

が完了した。気分的に清々した。

それから数日後に、ソ連の医師が着て身体検査が行われた。例のとおり、上半身裸にして、腕の皮を引っ張って肉がついた者をチェックする。その結果、一中隊六人、四中隊十人を残して、ほかの人はもとの中隊へ帰隊することになる。中隊に帰れば普通の作業に復帰させられる。

二中隊で残った四中隊十人の一人として私も残された。合計十六人は第三カテゴリー（体の貧弱な者）として、第二中隊の人員の中に入り作業をすることになる。ただし労働時間は、一日に六時間働けばよいことになっている。食事は一般の隊員と同じ時間に同じものを食堂でとることになる。朝の点呼、出発は一緒に言うが、帰りは二時間早く帰ってもよいようになったのである。

昭和二十一年六月、三十キロ収容所、道路清掃作業
三か月のオカ作業を終わりに、我々第三カテゴリーの十六人は、いよいよ作業に出ることになる。季節も野山の緑が広がり、囲いの外に出るのは絶好のときであ

った。私に割り当てられた作業は道路の清掃作業で、二人一組となり、大ぼうきで二キロの道路を掃いて、小石を両側へ掃き出すものである。ぼうきの柄の材料とする約二・五メートルの丸太一本と、パン袋を飯盒に入れ、腰にぶら下げ、兵隊の監視もつかずに出発する。初めは近距離なので徒歩である。現地近くになると、ぼうきの先に松葉をくくりつけて、道標のところから二人並び、中央から側面の方へ掃きだしながら進んでいく。自然を眺めながら、自由にのんびりとした仕事である。

側面の下には、タイヤ、木の根株、板切れくらいしか落ちていない。時々、トラックがスピードを出して通り過ぎていく。道路は傷んでいないので、掃除の進み方も順調である。昼食は黒パン二百五十グラムと塩漬けニシン百五十グラムだけである。終わったら、この山へ入って、松の実、キノコのありそうな方向を話し合う。午後は二―三時の間に終わると、山へ分け入り収穫に夢中になる。収容所に帰るのは五時半過ぎとなる。もちろん、松の実、キノコを持ち帰る。日も

長いし、早く帰ると炊事のまき割り等、使役をさせられることがあったので、一般の作業の帰り時間に合わせるようになった。

距離が遠くなると、トラック（マシーナー）で目的地まで行くこともあったが、早く終わって少しでも松の実を多く取るように、要領よく作業する。迎えに来るときは、予定時間に大体来るので、うかうかしていられなかった。何しろ、時計を持っていないので、腹時計に頼るから大変である。トラックの運転手と、松の実を飯盒一杯と枕パン一個と交換したのもこのころである。

キノコは日本のアワダケ（アマタケとも言う）に似て、裏側に網目のあるもので、表面が毒キノコのベニタケのようであるが、ぬめりがなく乾いた感じなので、食用になることが明白であった。ロシア人は食べないらしい。大きさは直径十センチくらいあり、大型ですぐ袋いっぱいになる。持ち帰って、夜に飯盒に入れて、塩魚の切れ端のだしで煮て食べる。松の実やきのこ汁で食糧不足の足しにして、胃袋を満たした。松の実に

よる黒パンとの物々交換は、体力維持に大いに役立てることができた。

昭和二十一年七月、三十キロ収容所、道路補修作業、道路清掃を打ち切って、今度は補修作業に移る。朝、ラバータ、カイロを担いで、飯盒に黒パンと塩魚を入れて腰につるして出発する。六キロくらいの範囲を道路補修するのが任務で、（一）路面の凹凸を土を補給して平らにする。（二）路肩の崩れを補修する。（三）土出し場所の設置をする。（スリップ車へまく土）（四）標識の柱、松葉の補修をする。（この標識は、道標とは別に約五十メートル間隔で丸い柱に松葉を横に二段に結びつけて、路肩を表示するために立てていた）等の保全に関する作業をする。

昼食を早めに終わって、相変わらずの松の実、キノコ取りは継続する。黒パンと松の実と交換できるトラックを探すのにも苦労する。長距離運転のトラックの運転手でないと、黒パンを積んでいないからである。

松の実も五葉松の多く生えているところでないとは短時間に収穫することができない。このころになると、一

番の敵は大きい蚊の来襲である。この蚊に刺されると、びっくりするほど痛くて、真つ赤にはれる。そのため、作業用として白色の布製の袋状の前面に、目、鼻、口が出る範囲を切り取り、黒い網が縫いつけてあるものを支給された。蚊は草木の生えているところに多く、これをかぶって蚊よけとした。収容所内では余り見かけなかった。

外気は、日中三十度以上に温度が上がるから、まさしく夏の季節である。湿度が低いので、わりあいしのごやすいが、外では蚊よけ覆いを取るわけにはいかない。この作業も一か月くらいで終了した。

占守島には、北は北海道から南は沖縄まで、全国から集まった軍人がいたことを知らないからだと思う。部隊は満州から来た現役の戦車連隊、独立歩兵大隊、アリュウシヤンのキスカ島から撤収した部隊、小笠原島から転属した高射砲部隊、東北地方からの補充兵部隊、臼砲部隊等の混成であった。

海軍第五一警備隊は軍艦乗り組で太平洋を駆けめぐった将兵、志願して各地の海兵団や教育施設で教育を

受けて配属された兵曹等、全国から集まった軍人の集団である。軍属には、日本人のほか朝鮮人も多数いたが、今はどうなつたろうか。飛行場も陸軍、海軍それぞれに一か所ずつあった。民間人も、サケの漁獲とそれの缶詰工場に男女が大勢働いていた。終戦とともに脱出して、無事日本に帰つたと聞いている。

マガダンが話題にあつて、四十六年前の状況が脳裏をかすめ、帰還後すぐノートにメモしてあつたものを年月で回顧すれば、より鮮明な記録になると、思い出しながら記録をたどつてみた。

日本に帰還後も、寒くなると小便が頻繁に出たくなる。朝は十分間隔で五回くらいで、以後、間隔が長くなる。間に合わず漏らすこともたびたびあつた。この頻尿症が原因で、数年前に膀胱がんとなり、膀胱切除手術をする。早期発見であつたため一命を助かり、現在に至っている。